

朝日新聞

第3回

少子化の街を襲った大災害 小児科医が見つめる子どもたちのこれから

有料記事

松本千聖 2024年4月7日 15時00分



わじまティーンラボに立つ小浦詩さん＝石川県輪島市 



1月1日夕。

小児科医の小浦（こうら）詩（うた）さん（42）は、12歳、9歳、6歳の子ども3人を連れて、石川県輪島市から大分へ帰省していた。

おせち料理を食べてテレビを見ていたところに、能登半島地震のニュース速報が飛び込んできた。

「最大震度7」「大津波警報」――。

昨年に輪島市で震度5弱の地震が起きていた。「本当に大きいのが来たんだ」

詩さんは2022年12月に夫婦で輪島に開業したばかりの「ごちゃまるクリニック」で、副院長を務める。すぐに、夫で院長の友行さん（44）に連絡した。友行さんは輪島の自宅で、自身の祖母、両親とお正月を過ごしていた。

祖母が家具に挟まれたが、なんとか引きずり出したところだったという。

「死ぬかもしれんけど、逃げる」

ひとまず家族全員が無事なことは確認できた。

その後、ニュースは炎に包まれる輪島朝市の様子を伝え始めた。自宅は朝市通りにあり、火災の発生場所からほど近い。クリニックもそこから数百メートルしか離れていない。

友行さんは、両親らを避難させ、往診バッグを携えて各地の避難所で負傷者の応急処置を始めるという。

詩さんはいてもたってもいられない気持ちだった。

移住し開業「まさにこれから」 その矢先に

富山で大学時代を過ごし、その後17年に、子どもたちを連れて友行さんの出身地である輪島に移り住んだ。

地元の病院勤務を経て、ごちゃまるクリニックを開業。総合内科専門医の友行さんと小児科医の詩さんとで、赤ちゃんから高齢者まで、多職種がつながって「ごちゃませ」に、病気だけでなく人生や家族も「まるごと」支えたいという思いを込めた。

輪島市は年間の出生数が80人ほど。少子高齢化が進む街では、子どもたちは小さなコミュニティで過ごし、ほとんどの子がそのまま地元の県立輪島高校に進学する。変化が乏しく、過ごす場所の選択肢も少ない側面がある。不登校の割合が高いとも言われていた。

「クリニックにいるだけでは、みんなの困りごとに気づけない」

詩さんは市立輪島中学校の学校医も務め、保健室での相談会も定期的に行った。10代の居場所づくりのためのNPOを立ち上げ、クリニックの2階と3階に「わじまティーンラボ」を開設。昨年12月末に開所式をしたばかりだった。

「まさにこれから」と期待が膨らんでいた矢先、地震が襲った。自宅は一部損壊したものの、焼失は免れた。クリニックも壁や天井の一部が落ちるなどしたが、建物は無事だった。

小児の患者は激減 「私は何をしたら」と葛藤

1月7日、子どもたち3人を実家の両親に預け、詩さんは輪島に戻ってきた。街の景色は、現実のものとは思えなかった。

クリニックは安全が確認できず、まずはかかりつけ患者の安否確認や、薬が必要な人への処方からスタートした。市の依頼を受け、母子避難所での親子の相談にも応じた。

ただ、友行さんが高齢の患者を中心に忙しく対応する一方で、小児の患者は激減していた。多くの子どもが市外へ避難し、街には地震前の3分の1ほどしか残っていなかった。非

常勤で診療する市立輪島病院では、受診がゼロの日もあった。

「私は何をしたらいいんだろう」。立ちすくむような思いだった。ただ、患者のために奔走する友行さんやクリニックのスタッフには言えなかった。

フェイスブックに葛藤を書き込んだところ、医師仲間から声が寄せられた。中でも、東日本大震災で支援経験がある先輩医師の言葉にはっとした。「小児科医が重要になるのは、この後だよ」

自宅で寝付けない・避難先で泣いている… 様々な相談

実際に、2月ごろから地震の影響とみられる受診や相談が増え始めた。

また地震が来るのが怖くて自宅で寝付けなくなったという中学生は、外来で定期的に様子を見ることになった。「2次避難先で子どもが泣いている。新しい環境で頑張ろうとしているけれど……」。そう言って相談してくる母親もいた。

もともと、親や子どもたちの困りごとをすくい取るべくクリニックの外での活動を始めた。「これから地震の影響が年単位で続いていく。私のやるべきことは変わらず、より工夫してやっていけばいいんだ」。改めて詩さんはそう感じた。

集団避難した中学生たちが身を寄せる白山市も訪れた。子どもたちは思った以上に元気でほっとした。

「いつもやっていることを6割くらいで」「自分の気持ちの揺れや何げない今を日記におさめておくといい」。様々な人たちからもらい、自らも助けられたアドバイスを、学校の先生たちに伝えた。

輪島に残る子どもたちが「かわいそう」にならないように

ごちゃまるクリニックは1階部分がまだ使える状況になく、駐車場に建てたコンテナでの診療が続いている。

3月の終わり、わじまティーンラボがようやく再開した。地震の前のように、小学校高学年～高校生の子どもたちが集まり、漫画を読んだり、自習室で勉強したり、異年齢で交流したりしている。

市外の避難先から戻ってきた子どももいるが、地震の前に比べれば少ない。通学路はがれきなどで危険が多い。体育館は避難所のまま、校庭では仮設住宅の建設が進み、子どもたちが体を動かす機会が減った。2月半ばに輪島に戻った自らの3人の子どもたちとの生活の中でも、環境の激変を肌身で感じる。

様々な心配事はあるが、子どもたちからは、この状況を乗り越えようとするたくましさも感じている。少なかった子どもが地震後にさらに減り、地元に残った子が「かわいそう」とならないよう、力を尽くしたいと考えている。

「今までのような小児科医としての仕事は減っているけれど、地域の健康のためにやることはたくさんある。みんなが戻ってきたいと思える輪島にしていきたい」

この記事を書いた人



松本千聖

くらし科学医療部

[+ フォロー](#)

専門・関心分野

医療、子どもや女性の健康、子育て

朝日新聞のデジタル版に掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.